

も心に残る、そして貴女の地理学研究の方向に、大きな影響をなげかける数多くのことがあると信じます。

貴女と同じ年令のころ、はじめて内蒙古の自然と文化に接したことが、35年をへた今日なお、自然と人間とのかわりに、強い関心を持ちつづけることになった大きな要因であることを、わたくしは否定したくないのです。感受性の強い、若い時代の体験はかけがえのない貴重なものです。正式の計画というのでは重荷でしょうから、折にふれ、感じたままを、素直に記録していかれることを願ってやみません。

1953年に、国連のフェローとしてオランダに約1年滞在した折、戦争のいまわしい思い出をのりこえて、親切にして下さった人々のことが何時までも脳裏をはなれません。女流ピアニストのCさんは、クリスマスの夜を、オランダの高名な作曲家の「富士讃歌」を弾いて歓待して下さいました。あの時の、富士の誕生をうたうピアノの音は、いつまでも耳底からきえないほど印象的でした。本屋のAさんは、収容所での苦しい思い出を語りながらも、これからは仲よくしていこうと大きな手で握手をしてきました。日本研究家のFさんは、なにくれとなく心を配って、わたくしを援助して下さいました。こうした、心あたたまつきあいが縁で、それから四度、五度とオランダを訪れ、旧交をあたためてきました。

ニュージーランドでも、数多くの方々の恩情に接することができました。マオリ人の母親をもつ人もいましたが、両親ともども、親切して下さいました。わたくしの拙い文章を、何回もブラッシュアップして下さいましたBさんも、忘れられない人の1人です。

人間にとって、心ほど大切なものはないと考えるようになりました。貴女が、入港する日本商船をみて、日本への夢をふくらませ、日本語を学び、そして日本への留学をはたしたことは、本当にすばらしいことだと思います。その夢を、あこがれの日本で、貴女自身がふくらませていくのを、わたくしは、静かに見守りたい。

では東京でお目にかかりましょう。

## 山中湖のワカサギ釣り

能勢幸雄

所用ではじめて筑波大学に行って、一晚、大学の中の立派な宿舎に泊って昨日帰京した。

昔、霞ヶ浦のワカサギの人工採卵や淡水真珠貝の養殖場の見学に出かけた時には、土浦の駅前はずい分とひなびたところで、串にさした素焼きのワカサギや、鰻やその他の湖産の魚の佃煮などを売る土産物屋がたくさん目についたものだった。むろん、今ではすっかりモダンになってしまって、駅前にはもうそんな店は一軒も見あたらない。しかし、駅のKIOSKで、ワカサギや小エビの佃煮の詰めあわせを一折り買うことができた。百貨店でも、どこにでもある珍しくもないものだが、昔風の素朴な包装で、何の何兵衛商店謹製というのが気にいったのである。

帰宅して、買って来た佃煮などで一杯やりながら、家人に筑波大学の様子や、土浦の話などをした。

そして、そのついでに、ワカサギは湖辺の冷たいすき間風の吹き込む番小屋で、煤けたストーブの天板の上で焼いたあつあつのを生醤油で食べるのが一番、などと話したりもした。

ワカサギといえば昨年2月に研究室で山中湖へ穴釣りに出かけたことを思い出す。年の始めに、何かの話からワカサギ釣りの話になり、山中湖畔に大学の寮もあることとて、早速実行に移したというわけである。標本採集を兼ねて、2月初めのすばらしく天気の良い土曜日に、都合のついた総勢9名が、フライ鍋、七輪、木炭等々を積みこんだ車に分乗して、白銀に光る富士を目標に一路西に向かった。

ワカサギの穴釣りは厚くはった氷にまず穴を開けることから始まる。風を避けるためにはそり付きの木製の小屋を借りる。小屋の床には長方形の穴があいていて氷の穴にあわせて釣り糸を垂れるのである。小屋は2人が向いあってしゃがめる程度の大きさで、引き戸を閉めると光は床の穴からしか入って来ない。小屋には炭火を持込んで暖がとれる。

この日の氷の厚さは約20cm。ワカサギは繊細な女性的な感じの魚である。それが時には5本の釣り針全部に一尾ずつつかまって、冷たくよどんだ水の底から白く揺れながら上って来る様子は、大げさにいうと夢幻的ともいえる美しさであった。

釣れた魚はそのまゝ氷の上に出しておくと、すぐに凍って氷にくっついてしまう。最も原始的な冷凍保存法である。

富士山が目の前に大きく姿を見せているだけに気温も低く、釣り糸にも小さな氷の玉がじゅずつなぎにつくし、氷の穴にも次々に新しい氷ができて来る。

寒さといえば、次の日の早朝5時の朝釣りに涉る連中をかり出そうとした時の寮の入口の寒暖計は-20℃に近かった。おそい朝食にガリガリに凍った漬け物がついたことも良い経験であって、このワカサギの穴釣りを研究室の年中行事の一つにしようかなどと話したものである。

とはいうものの、厳しい寒さにこりたためか、今年はまだ誰の口からもその話は出ない。

(1978・1・15記)

## ニュージーランドの旅

吉川虎雄

2ヶ月あまりのニュージーランド旅行から帰国した直後に原稿の執筆を依頼されたので、今度の旅行の間に感じたことを書いてみようという気になった。

私にとっては3度目のニュージーランド訪問であったが、主として都市に滞在した前2回の旅とはちがって、今回はその大半を僻地ですごしたので、多くの新しい知見がえられた。旅行の目的は第四紀地殻変動の調査で、いさゝかいかめしく聞えるが、要は海成段丘を調査して、第四紀地殻変動に関する日本との比較研究の資料をうることにある。調査地域は人口の少ないニュージーランドの中でも比較的人口の稀薄な北島北東部と南島北東岸で、前者はマオリ族の人口が白人のそれをしのぐ特異な地域でもある。